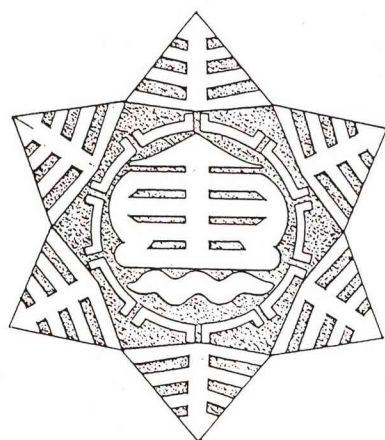
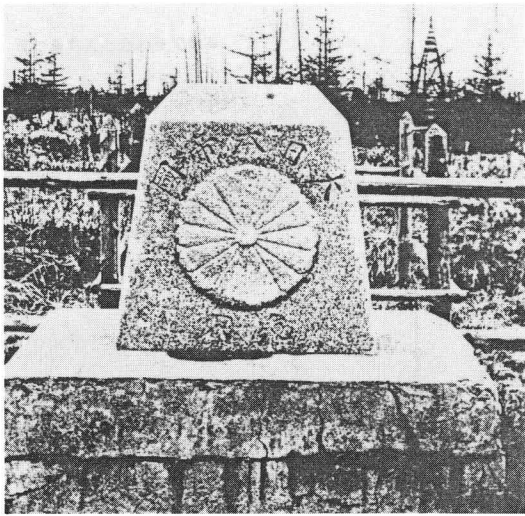


太 棒
惠須取真真帳



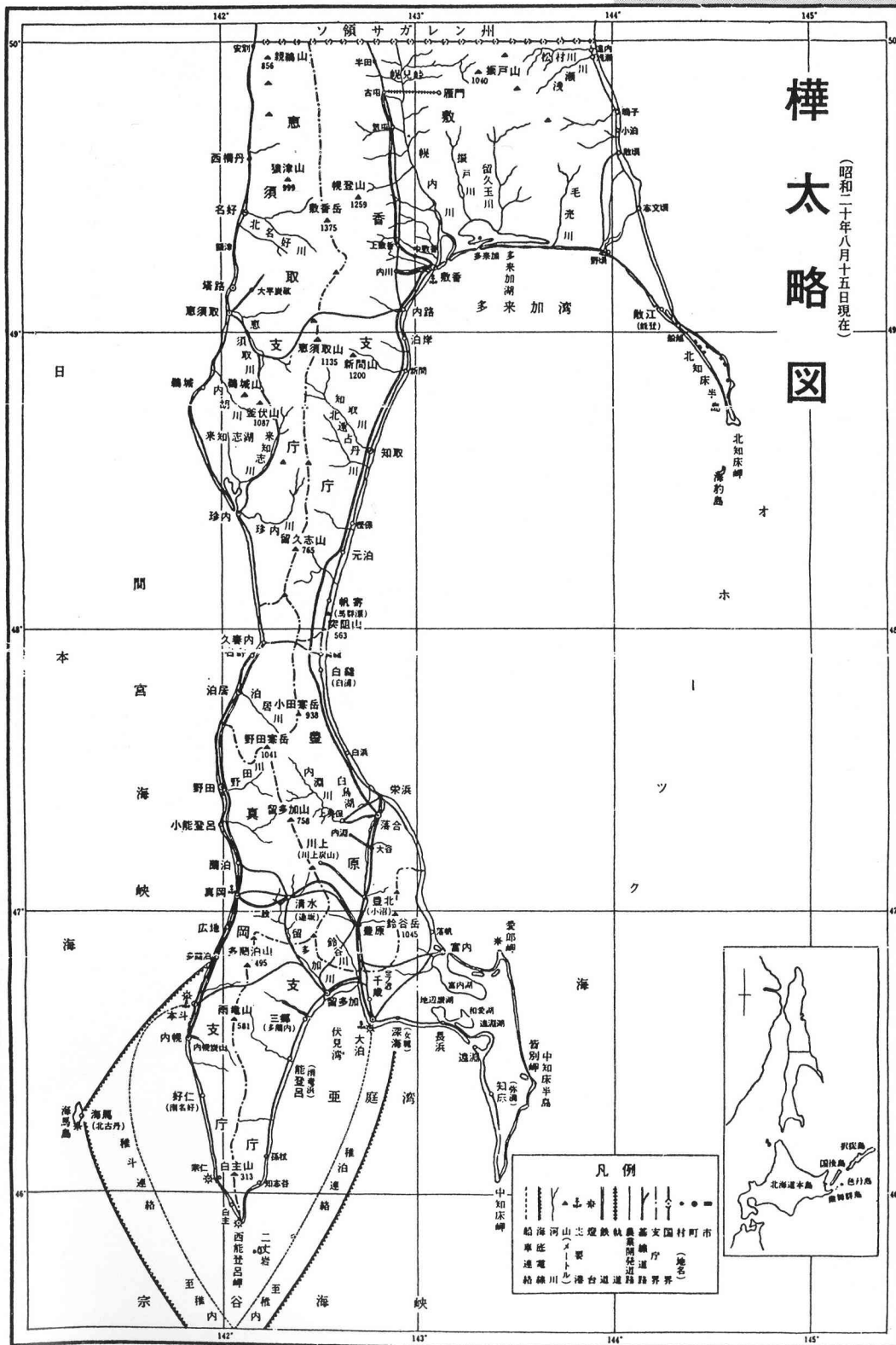
北海道惠須取会

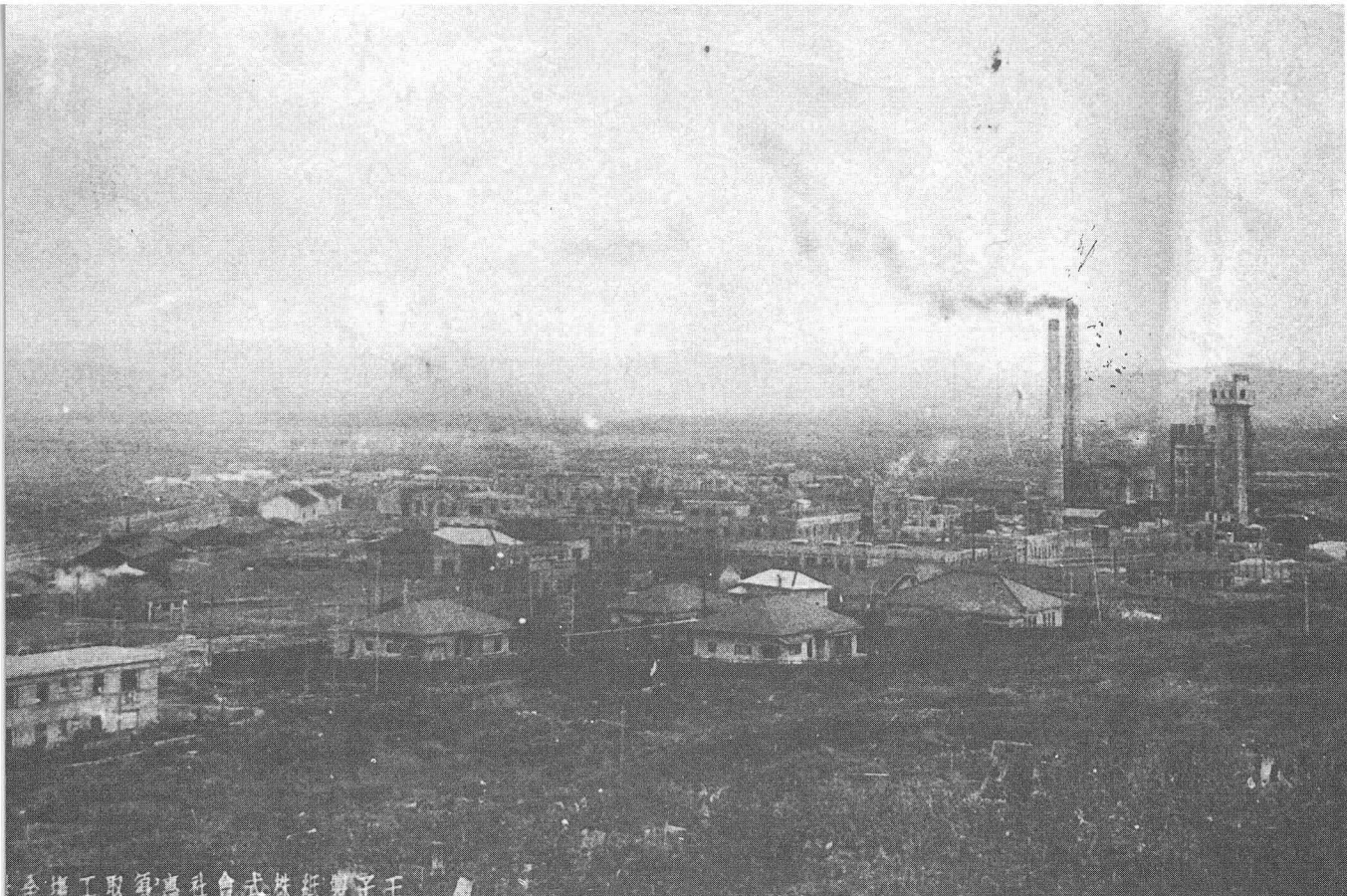


北緯50度線に設置されていた日ソ国境石



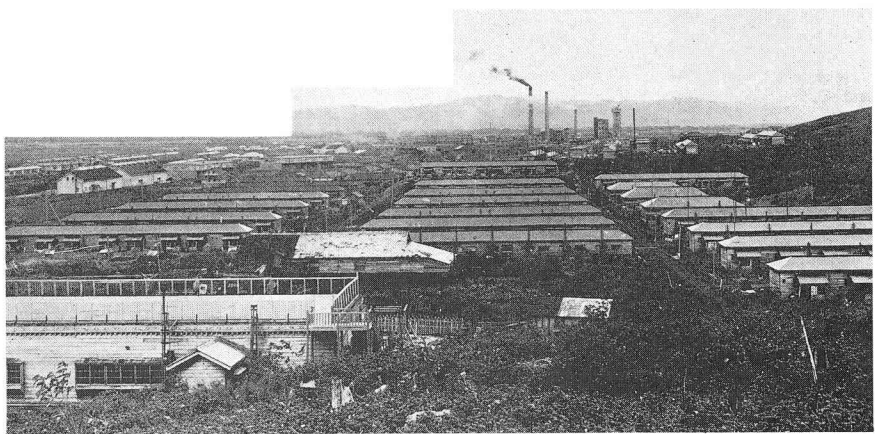
北緯50度線に設置されていた日ソ国境標





全盛期の王子製紙工場全景

全盛期の王子製紙工場全景



全盛期の王子製紙工場全景 社宅



川尻海岸時化の風景

寺社編

神社・寺院

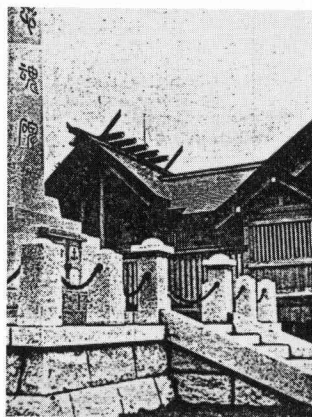


県社恵須取神社本殿前の記念撮影風景（昭和11年新築）

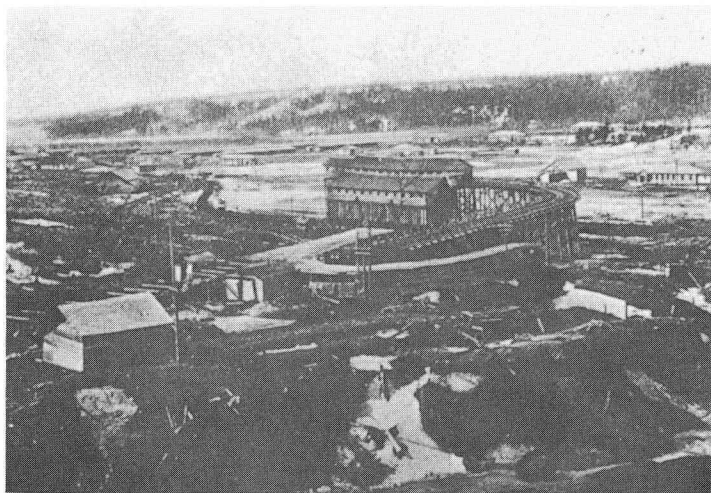


恵須取神社例祭で賑わうお祭り風景

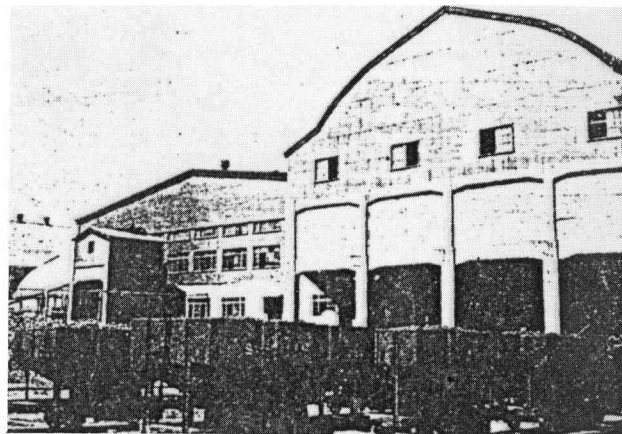
恵須取神社 奥殿・手前は忠魂碑



大平編



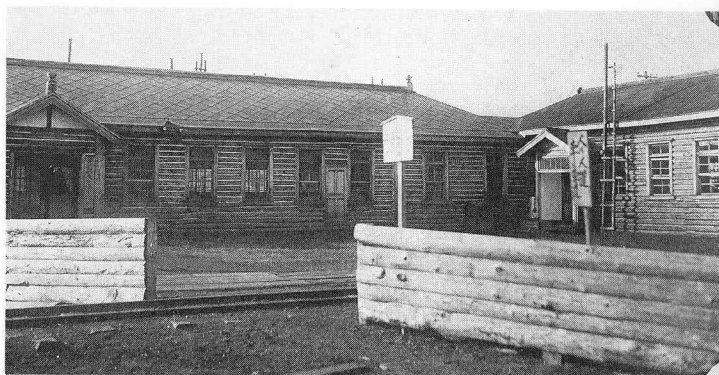
開鉱当初の選炭場附近（望郷樺太写真集より）



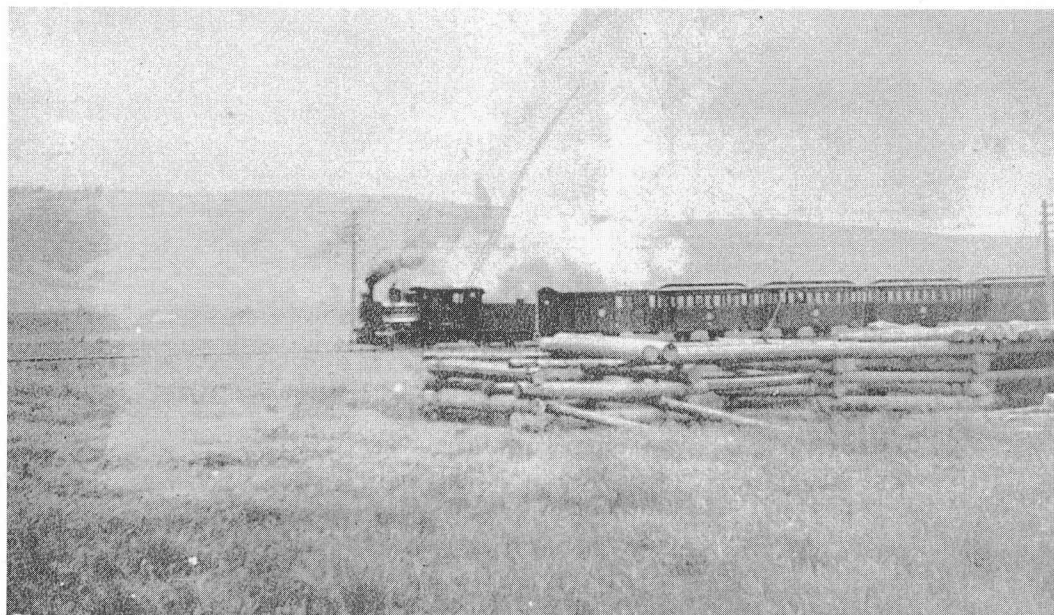
新設備を導入したあとの選炭場建物



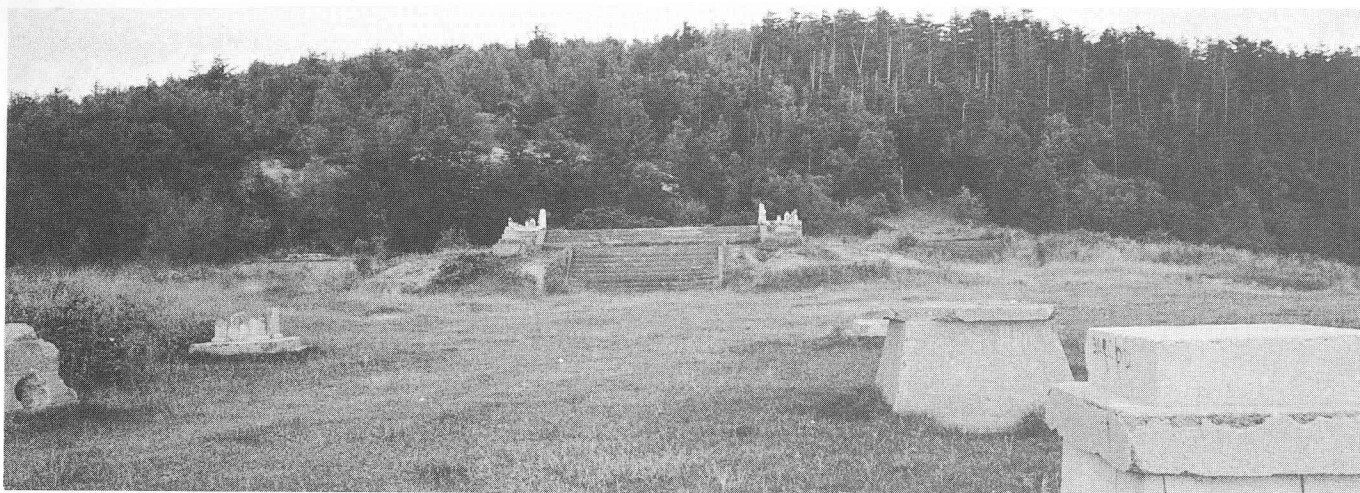
全国的にも良質を誇った炭層の露天掘り風景



大平鉱業所事務所



恵須取北浜町と大平を結ぶ軽便鉄道



恵須取神社の跡



一校グランド全景と校舎跡の一部



一校校門から本町及び南浜町方面を望む



恵須取神社境内に立っていた大川平三郎翁頌徳碑



埼玉県坂戸市役所敷地内に移設された大川平三郎翁頌徳碑



大川平三郎翁頌徳碑

大川平三郎翁頌徳碑

元樺太廳長官従四位勲三等 昌谷 彰 篆額

産業は立國の大本にして衆生安堵の鍵鑰なり、翁之をもつて奉公の大義とし其実業界に在る。已に六十有餘年終始思を産業興隆に致し心を民利の啓発に馳す。其創立參畫する所製紙、製鐵、紡織、鐵路、汽船、航空、電力、洋灰、拓殖より保險銀行に及び、其經始する地域南臺灣、北樺太より西の方朝鮮、滿州に達す。事業の廣汎なる活動の充實せる翁を措いて他に索むる能はず、就中製紙を以て大となす。

明治八年初めて王子製紙會社に入るや齡僅に十有六不拔の努力と卓犖の頭腦とは忽ち擢でられて、弱冠既に米國に派せられ爾來歐米を巡遊すること六度悉く技術の蘊奥を究めて改良創作に至らざるなく又躬ら四日市、九州中央、木曾、鴨綠江、樺太工業等數多の製紙會社を起し、富士製紙の社長を兼ね近く又臺灣紙業、東滿州人絹パルプ會社を創設し斯業をして今日歐米を凌ぐの隆昌を見るに至らしめたり。

大正十一年朝廷其實業精勵と衆民の模範たるの故を以て敕定の綠綬褒章を賜ひ其善行を表彰せられ昭和三年貴族院議員に勅選し勲三等に叙し瑞寶章を授けらる。

先是明治三十八年本島の我領有に歸するや翁之が開拓に意を注ぎ専ら力を西海岸に致す。樺太工業會社即是なり、大正三年本社及びパルプ工場を泊居に設け、次で製紙工場を真岡に建て更に進んで、大正十四年最北我が恵須取の地を卜して一大工場を建設し、又天與の大鑛區を開く。此地素人口二百に足らざるの寒村、翁の此舉に依り四方の民庶競ふて結綜し忽ち變じて武萬を超ゆるの大都と化し和平殷賑の樂土と成れり。

翁頃日邦家百年の計を慮り三大製紙會社の合同を策し、功成り名遂げて身退く。町民其徳を慕ひ恩を思い茲に碑を建てて其惠澤を永遠に仰がんとす。翁既に齡七十有五而かも鑒として壯者を凌ぎ福祿又之に隨ふ。古語に曰く善を作す之に百祥を降すと希くは翁の前途多幸ならんことを。

恵須取町長 從七位勲六等

稲垣敏夫撰

昭和九年九月

竹蔭

近藤

高美書

東都

野村保泉刻

大川平三郎翁について

大川翁は、万延元年(1860年)10月、川越藩三芳野村(現・坂戸市横沼)に生まれました。

幼年期は赤貧で過ごし、13歳の時に叔父であつた渋沢栄一を頼って上京。大学南校(帝国大学の前身)で学び、ドイツ語と英語(独学)を習得しました。

明治8年16歳の時、抄紙会社(後の王子製紙)に入社。努力を重ね、稲ワラパルプの大量生産に成功しました。その後も我が国最初の木材による化学パルプの製造に成功するなど多大な功績を残しました。

また技術者であると同時に企業家でもあつた彼は、大正3年樺太工業會社を創立し、その後富士製紙社長も兼ね、「製紙王」と呼ばれ80有余に及ぶ多くの事業に力を注ぎ

ました。昭和3年には貴族院議員にもなり、晩年は度々洪水に見舞われた三芳野村のために私財を投じて越辺川に堤防を築き、数度にわたる三芳野小学校増改築や校庭拡張等にも巨費を投じるなど郷土発展に尽くしました。一方、埼玉の学生のためには大正

14年、大川育英會を設立。多くの人材を育てたのです。大川翁は昭和11年病のため、多くの人々に惜しまれながら、その生涯を閉じました。



大川平三郎翁